

キリシタン語彙の受容史について ——「極楽」、「浄土」から「天国」へ——

小 川 俊 輔*

1. はじめに

わが国におけるキリスト教の歴史は、1549年、Francisco de Xavier の鹿児島上陸に始まる。その後、キリスト教の受容とともに多くのラテン語やポルトガル語が輸入されることとなった。それは、宣教師たちが「キリスト教の教義や信仰の中心的な事柄を表す語についてはラテン語、ポルトガル語をそのまま用いる」という言語政策を採ったためである。ラテン語は祈祷文や典礼の際の言語として用いられ、ポルトガル語は宣教師たちの共通語として話されていた。彼らは、欧州から最新の印刷技術を持ち込み、16世期末から17世紀初頭にかけて、長崎、天草地方を中心に多くのキリシタン文献（『Doctrina Chriftan』、『ぎやどべかどる』など）を印刷、出版した。これらの文献上には、数多くのラテン語、ポルトガル語が使用されている。報告者はこれを「キリシタン語彙」と命名し、九州地方における受容史を一語ごとに考察してきている。本報告では、「paraiso」（[paraidzo] 意天国）について考察をおこなう。

2. 方 法

まず、九州地方全域300地点において実地調査をおこなった。次に、最終調査票による264地点⁽¹⁾での調査結果を言語地図化した。そして、方言事象の分布、被調査者の説明、中世期、近世期、明治初期に出版された文献資料から「paraiso」の受容史を考察した。

調査は2003年8月から2005年11月にかけておこなった。被調査者は（原則として）

* 広島経済大学経済学部講師

外住歴3年以内、女性、調査時に60歳以上とした。質問文は次のとおりである。

「生前よい行いをして亡くなった人が、死後に行く場所を何と言いますか？」

3. 方言事象分布の概観

全域で「極楽浄土」類と「天国」が回答された。ただし、「極楽浄土」類はほぼ全ての地点で回答されているのに対し、「天国」は長崎県の島原半島北部、福岡県、熊本県の山間部などで回答されなかった。その他、長崎県域で「パライズ」類が3地点、九州全域において「あの世」、「先の世」類、「よかところ」がわずかに回答された。

4. 「Paraiso」

4.1. 潜伏キリシタン・カクレキリシタン⁽²⁾に伝承された「paraiso」

16世期中葉から17世紀初頭にかけてポルトガルやスペインから来日した宣教師たちは、「善人の行く死後の世界」を表す語として「paraiso」を用いた。「paraiso」の文献初出は1592年刊『Doctrina Chriftan』である。他にも1593年刊『ばうちずもの授けよう』、1593年刊『病者を扶くる心得』、1600年刊『おらしよの翻譯』、1604-1608年刊『日本大文典』、1605年刊『妙貞問答』などのキリシタン資料に用例がある。

方言調査において「paraidzo」または「paraiso」を回答した被調査者の帰依する宗教はカクレキリシタンとカトリック（先祖がカクレキリシタンで親の代にカトリックに改宗）であった。

以上のことに加え、長崎県平戸市生月町のカクレキリシタンが伝承してきた『オラシヨ⁽³⁾』の中に「paraiso」の用例があることから、⁽⁴⁾「paraidzo」「paraiso」が回答された3地点では、中世末期にキリシタンの布教活動がおこなわれ、政府による禁教政策後もひそかにキリシタン信仰が続けられ、「paraiso」が保持、継承されてきたと考えられる。

4.2. 明治期カトリック教会における「paraiso」

先祖が潜伏キリシタン・カクレキリシタンで、親の代にカトリックに改宗した被調査者の一人が「paraidzo」を回答し、これについて、次のように説明した。

○「カトリック教会でも「paraidzo」を使う。天国のこと。「[paraidzo] に行こう」などという。」

カトリック教会において、明治以降も「paraiso」が用いられたことは、明治初

期に長崎で印刷、出版されたカトリック文献（1868年刊『聖教日課』, 1869年刊『胡無知理佐无之略』, 1872年刊『聖教初学要理』など）上の用例から確かめることができる。これらは、長崎大浦天主堂の司教であった Bernard Thadée Petitjean が編纂したものである。Petitjean は、潜伏キリシタンによって中世末期から明治初期まで伝えられたキリシタン語彙を使用してこれらの教理書を編纂し、潜伏キリシタンやカトリック教徒に配布し、布教活動を展開した⁽⁵⁾。分布地図上に表れた3つの「paraiso」のうち、カトリック教徒である被調査者から「paraiso」が回答された背景には、上記の布教活動・出版活動があるものと考えられる。

5. 「天国」

5.1. 明治初期にキリスト教会で使用され始めた「天国」

「天国」がわが国で執筆された文献上に初めて現れるのは、平田篤胤（1806）『本教外篇』であるとみられる。この書は、禁教下にあつて、中国語で書かれたキリスト教書を平田がひそかに読み、私的に書き付けたものである（鈴木（2006））。冒頭には「未許他見」の文言が付されており、公には出版されなかった。

公に出版された文献上に「天国」の用例が初めて現れるのは、James Curtis Hepburn（1873）『新約聖書馬太伝』においてである。この書の出版の後、プロテスタント宣教師により多くの聖書翻訳がおこなわれ、「天国」が広く使用されるようになっていった。これに伴い、やがて、キリスト教の文献上から「paraiso」は消えていったのである。

以上、明治初期キリスト教文献における「天国」の用例から、「天国」は幕末明治期からキリスト教会で使用され始めた語である⁽⁶⁾と考えられる。

5.2. 仏教徒が幼年者に対して使用する「天国」

実地調査から、現在、多くの仏教徒が「天国」を受容し、使用していることが明らかとなった。⁽⁷⁾とりわけ、幼年者に対する配慮表現として「天国」が使用されている点が注目される。このことについて、被調査者は次のように説明している。

- 「大人同士では「極楽」を使う。子どもには「天国」を使う。「天国」は子どもには聞きやすいことば。」
- 「子ども相手に話す時には「天国」を使う。子どもは「極楽」といっても分からないから。」
- 「子ども達には「浄土」といっても分からないから「天国」という。」

これらの説明は計12地点においてなされた。そして、その12地点はそれぞれ隣接

していないことから、幼年者に対する配慮表現として「天国」を使用するのは、地理的に伝播したのではなく、同時多発的におこなわれ始めたのではないかと考えられる。

5.3. 「天国」の使用を意図的に避ける仏教徒

多くの仏教徒が「天国」を受容する一方で、「天国」を用いない仏教徒もいる。「天国」を用いない第1の理由は「天国」に代わる仏教系の語「極楽浄土」類があるからであろう。しかし、明確な意志を持って「天国」の使用を避けている人もいる。彼らは「天国」をキリスト教のことばであると考え、意図的に使用を避けているのである。下記はそのことを示す被調査者の説明である。

- 「キリスト教は「天国」と言う。お寺で「天国」を言うと怒られる。」
- 「「天国」はキリスト教の言葉だが、常識的に知っている。但し、私は宗教が違うから使わない。」

これらの説明は長崎県域を中心に九州全域で得られた。そこには、キリスト教と自らの帰依する信仰とを明確に区別する意識があり、その意識によって「天国」の使用を避けている事実が認められる。さらに、この意識の有無には地域差が認められ、長崎県域では他県域に比して顕著にこの意識が強い。

5.4. 「天国」を受容しない浄土真宗門徒

浄土真宗門徒の「天国」の回答率は、浄土宗、真言宗、禅宗、日蓮宗信者のそれと比べ、著しく低い。すなわち、浄土真宗門徒は他宗派信者に比べ、「天国」を受容していないのである。その理由の1つに、浄土真宗門戸は結束力が強く、強固な寺社基盤を形成していることが挙げられる。明治初期に禁教令が解かれた際、浄土真宗教団はキリスト教排斥運動を展開した。大濱⁽⁸⁾(1979)はその理由を、浄土真宗門徒に本願寺の教説以外に救われないという確信が強くゆきわたっており、そのような宗教的信念は、他の諸宗派において乏しく浄土真宗に固有であったため、と説明している。他宗派の信者に比べ浄土真宗門徒の間で「天国」の受容が進んでいないのは、以上のような歴史的経緯によるものと考えられる。

5.5. 長崎県域における「天国」受容の遅れ

長崎県域では、他県域に比べ、「天国」の受容が進んでいない。これは、長崎県の離島・沿岸地域におけるかつてのキリスト教・キリスト教徒に対する差別・差別意識の名残であると考えられる。当該地域における、キリスト教・キリスト教徒に

対する差別・差別意識については小川（2007）に詳しい。

6. まとめ

以上の考察から、九州地方におけるキリシタン語彙「paraiso」の受容史は、大略次のようにまとめることができる。

中世期にキリシタン宣教師の言語戦略を背景として「paraiso」が受容された。「paraiso」は、潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人びとにより、禁教時代を経て現代まで伝承された。明治以降、カトリック信者の間でも「paraiso」は用いられた。しかし、カトリック教会における「paraiso」は次第に「天国」に取って代わられていった。

「天国」は、明治初期に邦訳聖書の中で使用され始めたことばである。その後、キリスト教徒以外の人びとにも受容され、使用され始めている。また、一部の人びとの間では、幼年者に対する配慮表現として使用されている。他方、「天国」はキリスト教のことばである」という意識を持つ仏教徒は、「天国」を受容せず、明確な意志をもってその使用を避けている。

しかし、「天国」がキリスト教のことばであるという意識が薄れるにつれ、「天国」と「極楽浄土」類との併用が進んできている。今後は、仏教的文脈においてのみ「極楽浄土」類が使用され、一般的な「善人の行く死後の世界」を表す語としては、「天国」が使用されることになるものと考えられる。

注

- (1) 各県ごとの調査地点数は次のとおりである。福岡15, 佐賀18, 長崎137, 大分20, 熊本25, 宮崎20, 鹿児島29。なお、当該事象については、予め長崎県域の多様性・特異性が予想されたため、当該県域の調査地点を多くした。
- (2) 本報告では宮崎（2002）に従い「カクレキリシタン」を次のように定義する。すなわち、「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、1873年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けている人びとおよびその宗教」。現在も長崎県下に存在する。なお、近世期（具体的には最後の宣教師小西マンショが殉教したとされる1644年）～1873年における同種の信仰者およびその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、「カクレキリシタン」とは区別する。この区別は、片岡（1967）、宮崎（1996, 2002）に従うものである。
- (3) カクレキリシタンの間で使用されている語。「祈祷文」,「祈祷行為」の意。
- (4) 長崎県教育委員会（1999）による。同地のカクレキリシタン組織の中で指導的立場にあった明賀晴夫氏のノートに記載されていたもの。
- (5) 松崎（1928）、ラウレス（1940）、海老澤（1943）などによれば、明治初期、長崎・天草

地方の潜伏キリシタン・カクレキリシタンを再びカトリック教会へ戻す目的で、潜伏キリシタン・カクレキリシタンが代々受け継いできたラテン語・ポルトガル語を用いたカトリック教理書が長崎で多く編纂・出版された。純心女子短期大学長崎地方文化史研究所(1986)記載のプチジャン司教の書簡(1865年5月29日付)に、「布教や教理書出版の際には、潜伏キリシタン・カクレキリシタンが代々受け継いできたことばを使用しなければ、自分たちを潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人びとが信仰してきたものとは異なる宗教の指導者のように思わせてしまうので、それらのことばを使うべきである」との見解を示した記載がある(113-114頁)。この方針に基づいて編纂・出版された教理書によって布教活動が行われ、潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人びとが、徐々にカトリック教会へ戻ることとなった。

- (6) 孫(2004)は「天国」について、漢訳聖書とキリスト教義関連の文献を調査し、「聖書を日本語に翻訳する時、漢訳聖書を参考にしながら、おそらく幕末明治初期に、「天国」という言葉をそのまま受け入れたのではないか」と結論づけている。
- (7) 加藤(2006)はその経緯について、聖書で用いられた「天国」の本来の語意が浸透する前に「極楽」と明確に区別されないまま文学作品で使用されたこと、新聞において死後の世界を表現していた「極楽」が「天国」に替わったこと、「天国の様な沖縄」「天国の如し」などと、宗教的語意を含みながら用いられていた「天国」が、その造語力の旺盛さから「青空天国」「健康天国」などの複合語を作ることにより宗教的要素が取り除かれていったこと、の3点を挙げる。
- (8) 安丸(1988)の357頁にキリスト教排斥の村規約(愛知県碧海郡和泉村(現安城市和泉町)、明治15年1月)が翻刻されている。それを説明して「キリスト教を排斥する村掟をつくり、村八分をもって信者を排除するのは、キリスト教排斥運動の手段の1つで、真宗ではそうした規約をつくるよう指導している。キリスト教の排斥に熱心なのは、真宗、日蓮宗、神道であったが、教勢の大きさもあって真宗の果たした役割が大きい」と記している。浄土真宗がキリスト教排斥に力を入れていたことについては大濱(1979)67-89頁、チースリク(1999)302-303頁などにも記述がある。
- (9) 柴田(1988)は糸魚川地方における鳥追い歌の変遷について考察をおこなったものである。その中で、禅宗または浄土宗の多い地域では鳥追い行事そのものが残っているのに対し、浄土真宗が多いところではそれが残っていない傾向が強いことを報告している。また、桜田(1958)には「年中行事に関する習俗は宗教によって改変されることが多い。一般に真宗のおこなわれている地域では農耕儀礼に関する行事がいちじるしくうすくなっている。」(72頁)とある。両例とも浄土真宗の特異であることを示す資料である。これらは、本報告において「浄土真宗門徒が他宗派の信徒に比べ「天国」を受容しない」という事実と連続する事象であると思われる。

参 考 文 献

- チースリク、フーベルト(監修)(1999)『日本史小百科〈キリシタン〉』東京堂出版
 江端義夫(編)(2002)『朝倉日本語講座⑩方言』朝倉書店
 海老澤有道(1943)『切支丹典籍叢考』拓文堂
 橋本進吉(1961)『キリシタン教義の研究』岩波書店
 林重雄(編)(1981)『笠間索引叢刊77 ばうちずもの授けやう おらしよの飜訳 本文及び総索引』笠間書院

- 平田篤胤全集刊行会（編）（1977）『新修 平田篤胤全集 第七巻』名著出版
- 純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所（編）（1986）『プチジャン司教書簡集』純心女子短期大学
- 片岡弥吉（1967）『かくれキリシタン』日本放送出版協会
- 加藤早苗（2006）「現代日本語「天国（てんごく）」の出自から定着まで」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』25, 101-116頁
- ラウレス, ヨハネ（1940）「プチジャン司教とキリシタン伝統」（『カトリック研究』20-2）カトリック研究社（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（編）（1986）に再録, 225-238頁）
- 松崎實（1928）「天主教の部解題」明治文化研究会（編）『明治文化全集 第19巻 宗教篇』5-20頁, 日本評論社
- 明治文化研究会（編）（1928）『明治文化全集 第19巻 宗教篇』日本評論社
- 宮崎賢太郎（1996）『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
- 宮崎賢太郎（2002）『カクレキリシタン』長崎新聞社
- 長崎県教育委員会（1999）『長崎県文化財調査報告書 第153集 長崎県のカクレキリシタンー長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書ー』長崎県教育委員会
- 小川俊輔（2007）「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』55-II, 173-182頁
- 大濱徹也（1979）『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館
- 桜田勝徳・宮本常一（1958）「日本民俗の地域的性格」大間知篤三他（編）『日本民俗学大系 2 日本民俗学の歴史と課題』平凡社
- 柴田武（1988）「鳥追い歌の変遷」『方言論』182-208頁, 平凡社
- 孫遜（2004）「近代日本における漢訳聖書の受容ー「天国」という言葉の受け入れを巡ってー」『京都府立大学学術報告 人文・社会』56, 63-79頁
- 鈴木範久（2006）『聖書の日本語』岩波書店
- Viereck, Wolfgang（2006）「Chasing Butterflies: Why is a Butterfly called 'Butterfly'?」Oebel, Guido（編）『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblata』pp.73-76, Lincom Europa
- 安丸良夫・宮地正人（校注）（1988）『日本近代思想大系 5 宗教と国家』岩波書店

付 記

研究集会では多くの先生方からたいへん有益なご意見, ご質問を賜りました。厚く御礼申し上げます。本報告は発表者の発表内容の要約を旨としたため, それらを反映させることができませんでした。論文としてまとめる際に, 反映させたいと考えています。なお, 本報告は日本学術振興会平成20年度科学研究費補助金若手研究（スタートアップ）（課題番号20820061「九州地方域方言における渡来語の受容史についての地理言語学的研究」）の研究助成を受けています。